

# 池田大作の教育思想

## —女子教育の観点から（1）—

井 上 比呂子

はじめに

1. 日本における女子教育の歴史と系譜
  - ① 明治期以前の女性観
  - ② 明治期・大正期の女子教育
  - ③ 戦後の女子教育
2. 創価一貫教育における女子教育
  - ① 創価女子中学・高等学校
  - ② 創価女子短期大学
3. 池田の教育思想の考察
  - ① 他の教育思想との関連性
  - ② 池田の思想の独自性

終わりに

はじめに

創価大学の創立者、池田大作（以下、池田と記す）は幼稚園から大学までの教育機関を創立した教育者である。彼の思想研究において、女子教育という視点がある。池田は昭和43年（1968年）に東京・小平に男子校である創価学園（中学・高等学校）を創立し、5年後の昭和48年（1973年）に大阪・交野に創価女子中学・高等学校を創立した。そこで池田はさまざまな形でスピーチや言葉を残しており、そこに女子教育への思想の一端を見ることができる。創価女子中学・高等学校は昭和57年（1982年）に共学となり、関西創価学園と名を変えた。さらに、池田は昭和60年（1985年）に東京・八王子に女子高等教育機関として創価女子短期大学を創立した。この大学は創立から20年あまりになるが、学生の就職率も高く、文部科学省のGPに2年連続（平成17・18年度）で採用されるなどの実績を残しており、日本でも有数の女子短期大学といえよう。

本稿では、池田の教育思想を女子教育という観点から読み解くことを目的とする。資料としては一貫教育の中の関西創価女子学園（現在の関西創価学園）、また創価女子短期大学での池田のスピーチや著作を用いる。なぜ池田は女子校を創立したのだろうか。創価学園は東京に男子校、関西に女子校という体制が10年ほど続いたが、女性の特性に着目した教育理念はおそらく男子校で

行っているものとは異なるであろう。男子校であった東京創価学園でのスピーチには見られなかった特徴などについても検討することによって、女性特有の特性を伸ばすことを促すメッセージについて新たな発見ができるかもしれない。

本稿では、はじめに、日本における女子教育の歴史について簡単に概観する。女子教育の歴史や女子教育に影響を与えた人物・学校などを紹介しながら、現実にはどのような学校でどのような女性を育てることを主眼として教育がおこなわれていたのか、時代背景・社会背景もふまえながらみていきたい。当時の女性教育に関する思想としては、良妻賢母主義の教育やナショナリズムに裏打ちされた国民としての女子教育などが主流であったが、明治期から昭和にかけて、また戦後へとどのように女子教育への思想が変わっていったのかに着目していきたい。

次に、関西創価女子学園と創価女子短期大学における池田の言説を通して、彼の女子教育に関する思想を分析する。平成14年（2002年）に創価女子短期大学で池田は特別授業を行ったことがあり、女子学生に向けたメッセージや教育の理念などをそこから見ることができる。また、設立時の池田の言葉や、第1回入学式でのスピーチなどに彼の教育理念の一端をうかがうことができよう。

以上のように日本の女子教育に関する理論や思想の概要をふまえたうえで、池田の女子教育の視点をどのように位置づけるかが今回の課題である。それがどのような独自性があり、また他の教育思想と比べて、どの側面で関連性を有するのかを検討することは、池田思想を考察する上で不可欠なことといえる。最終的には、池田の創立した教育機関における女子教育の特徴を、男子教育や一般的な女子教育の学校と対比させることにより浮き彫りにしていきたい。その作業を通して、池田の教育思想についてより深い理解を得ることができ、次代の女子教育のあり方について何らかの知見が得られるものと考えられる。

## 1. 日本における女子教育の歴史と系譜

### ① 明治期以前の女性観

現代は、教育における男女平等が確立されているが、明治以前は、女性は男性に比べて教育、社会的役割などのさまざまな側面に対等に扱われてはいなかった<sup>(1)</sup>。当時の有名な思想としては、徳川封建期に全国を風靡した女大学の「七去」「三従の道」がある。ここでは、近世女子教育思想の古典的著作として有名である貝原益軒の「教女子法（女子を教ゆる法）」の内容を参照してみたい<sup>(2)</sup>。貝原の女子教育の基盤は、女性は「内」をおさめ、男子が「外」を治めるという男女分業にある。そこでは、女性は男性と同等の位置におかれず、独立した人格としては考えられていない。「内」を治めるとは、いかに上手に人に従うかということであり、家庭内でしたがる相手は女性の一生を通しておもに3つに分けられ、これを「三従」とよんだ。つまり、「父の家にあ

(1) 碓井知鶴子『女子教育の近代と現代—日米の比較教育学的試論—』近代文藝社、1994年。

(2) 貝原益軒「教=女子法一」、三井為友編『日本婦人問題資料集成 第四卷=教育』所収、ドメス出版、1977年、90—98頁。

りては父にしたがひ、夫の家にゆきては夫にしたがひ、夫死しては子にしたがふを三従といふ」となるわけである<sup>(3)</sup>。幼児期は父親に、結婚後は夫に、そして老後は子どもに従うのが女性としての望ましい生き方で、女兒を持つ親はこの道はずれないような教育を心がけなければならなかった。このような当時の儒教的な女性観は、女性の人格的、社会的、経済的独立という近代の女性解放思想とは全く異なる発想であったといえよう。

## ② 明治期の女子教育

明治期に入ると、社会における女性の役割が「家庭における教育の担い手」という面で見直されるようになり、女子にも教育を与えるという動きが出てきた。明治5年（1872年）に、学校制度や教員養成に関する基本的な規定である「学制」が發布されたが、そこでの女子教育奨励の理由は、「賢き母」を作るという点にあった<sup>(4)</sup>。そこには、新しい国を作っていく人材養成の基本的役割を果たすのが母親であり、賢い有望な人材を育てるためには、まず母親自身が賢くなるべきであるという理念が前提にあった。この文部省方針を見る限りでは、先ほどの「三従」に見られる封建的儒教的な女性観ではなく、新時代の人材養成の重要な担い手として、積極的に女性の価値を認めているようにも読み取れ、これが明治初期の女子教育観が啓蒙的であるとされる所以である。だが、実際は男子と同じ教育を受けたとしても、女子には男子と同じ意味での立身出世や社会貢献ははじめから想定されておらず、ひたすら家庭内での賢い母親になるというのが教育目的であったといえる。その意味で、女性にとっての本当の独立した人格を認めてはいなかったのではなかろうかと考えられる。このような「賢き母」という女子教育奨励の大義名分は、明治の「学制」期以降も、女子教育の根底を貫く理念となっていくが、その具体的な現れ方は各時代の政治的、社会的状況を反映して変化していくこととなる。

明治期の日本の女子高等教育は大きく分けると、官立の女子師範学校と私立のカトリック系の学校という二つの流れがあった。官立のものとしては明治八年にお茶の水に女子師範学校が開設され、これが現在のお茶の水女子大学の母体となった<sup>(5)</sup>。学制発布の明治初期のころは、政府の開花政策、啓蒙政策が社会の進展の中で受け入れられ、女子教育もわずかながら芽生え、発展していく時期であった。

こうした状況の中であって、女子教育の初期に貢献したのは、伝道を目的に来日した宣教師らによって始められたミッション系の女学校である。女学校については学制による規制がないことから、当時の女性たちの要求に応えるために、西洋の男女平等の教育理念に基づいた新しい教育が行われた。私立ではキリスト教の影響からミッションスクールが多く開校し、その先駆けとして明治8年（1875年）、跡見花蹊が神田猿学町に跡見女学校を開き、現在に至っている。また、下田歌子が明治5年（1872年）に伊藤博文に勧められて開いた桃天塾は、後の実践女子高等学校の

<sup>(3)</sup> 貝原「教ニ女子法一」、92頁。

<sup>(4)</sup> 確井知鶴子『女子教育の近代と現代—日米の比較教育学的試論—』近代文藝社、1994年、16頁。

<sup>(5)</sup> 小河織衣『女子教育事始』丸善株式会社、1995年。

成立につながった。これらのミッションスクールは日本の女子教育において、単に教育の機会の普及というだけでなく、英語教育の発展にも寄与したといえる<sup>(6)</sup>。

明治30年代になると、女学校の開設願が増加し、女子教育はひとつの開花期を迎えたといえる。明治32年(1899年)に高等女学校令が制定され、当時の文部大臣である井上毅は女性に対する中等教育の重要性を認識したうえで、高等女学校の整備に力を尽くした。井上は女子教育は将来の家庭教育に大きな影響を与えるものであるととらえ、「男女の生理的な差異をもとに、その役割の違いと固有の性能を固定化して強調する理念に立って、女学校教育の目的を『貞淑の徳』の滋養にある」としたのであった<sup>(7)</sup>。この高等女学校令が実施されることにより、各県に一枚は女学校を設置することになった。これによって、明治初期にふるわなかった官公立の女学校が躍進をとげた。明治33年(1900年)に津田梅子が女子英語塾、吉岡弥生が東京女医学校、横井玉子が女子美術学校を創立、翌34年(1901年)に成瀬仁蔵が日本女子大(日本女子大学)、大正8年(1919年)に東京女子大が創立された<sup>(8)</sup>。教員養成を目的とした女子高等教育の機関としては、明治22年(1889年)創立の東京女子高等師範学校と明治42年(1909年)創立の奈良女子高等師範学校があげられる<sup>(9)</sup>。このように、これらの女子大学・女学校は、多くの歴史的制約の中で女性の学びと社会的地位向上を担うという歴史的使命を果たしてきたといえる。

ここで、明治初期に発展したミッション系女学校の例として、神戸女学院大学とその教育理念についてみていきたい。神戸女学院大学は、明治6年(1873年)に米国伝道会派遣のタルカット、ダッドレー両宣教師が神戸に私塾を開いたことが始まりで、明治12年(1879年)に校名を「神戸英和女学校」と改称し、明治24年(1891年)より本格的な女子高等教育を開始した、関西で最も歴史の古い女子大学の一つといえる。同大学教授である原田園子は「神戸女学院大学の女性教育での学び」という報告の中で、女子教育について以下のように述べている。「私たちは人間として生まれていますが、基本的に二つの性がある中で、女性という性を持って生まれている、という意味での資質、個々の能力・才能、そして本学で受けた教育の統合としての、女性であることの特性、またその視点や感性を生かして、内外での社会的寄与をしつつ、共同・共生の社会を発展させていく学びがなされる、そういった女性教育をしたいと思います。」<sup>(10)</sup>女性であることの特性を生かす教育とは何かというと、神戸女学院大学の場合は、ミッションスクールの前身を受けて、「神を愛し、隣人を愛する」というキリスト教精神が根底にあり、さらに「自ら考え行動する女性となるためのリベラル・アーツ&サイエンス教育による学び」が基本になっている。このように、神戸女学院大学の教育理念としては、キリスト教精神と進歩的な女性への志向性の2点が、基本方針として働いているといえる。

(6) 佐々木徹郎『大学、女性、家庭教育—評論』レター出版印刷、2000年、243頁。

(7) 村田鈴子『教育女性学入門』信山社、1990年、29頁。

(8) 小河『女子教育事始』、6頁。

(9) 佐々木『大学、女性、家庭教育—評論』、250頁。

(10) 原田園子「神戸女学院大学の女性教育での学び」神戸女学院大学文学部総合文化学科編『神戸女学院大学総文叢書 女子教育、再考』初秋、冬弓舎、2006年、79頁。

次に、良妻賢母を掲げた女学校の例として、実践女学校を取り上げる。実践女学校は明治32年（1899年）に開校したが、学校設立の趣旨は「修身齋家に必須なる実学を享受し、以て賢母良妻を養成」することを目的としていた<sup>(11)</sup>。ここでの「実学」とは女子が社会に広く適応するために教育することであり、校名を「実践」としたのもこれに由来している。また、良妻賢母ではなく、「賢母良妻」としたのも、良き妻であるよりも、まず賢い母となることを重要視したからである。これは国家主義的な良妻賢母主義が学校の方針に採用された一つの例といえるであろう。

このように明治期の女子教育は伝統的な日本の女性を作り上げようとする良妻賢母の育成がうたわれてきた。これはいわゆる、「家庭婦人を目指し、お家を大事とし、夫を主君と仰ぎ、舅姑を親として仕えながらその子をよく教え導くことを婦道とし、そのために婦徳を滋養すべきであるとする」思想である<sup>(12)</sup>。女性の社会的役割についての伝統的考え方の一つであり、封建的な家父長制の社会背景が反映され、女性の三従の精神ともに通ずるものがあるといえる<sup>(13)</sup>。

深谷昌志によれば、この思想は、「ナショナリズムの台頭を背景に、儒教的なものを土台としながら、民衆の女性像からの規制を受けつつ、西欧の女性像を屈折して吸収した複合思想」であり、天皇制家族国家観を支える重要なイデオロギーとしての働きを持っていた<sup>(14)</sup>。また、良妻賢母思想を考える上で、「男は外で、女は内」という性役割分業が、当時の日本の産業戦略の一環として効果的に機能したという点も見落とすことはできない。つまり、「産業戦士として外で働く男性がエネルギー補給のための精神的・肉体的休養の場を家庭に求め、その家庭では、次なる労働者を生産するための子育てが行われるとなると、その特性から見て女性が担当するのが適当である」<sup>(15)</sup>という考えが存在したことである。このように、良妻賢母思想は国家主義を支えるイデオロギーとしてだけでなく、日本の経済発展にも効果的に寄与する思想として受け入れられていたと考えられる。だが、女性の特性や役割を家庭に限定するという考えは、女子教育における教育内容を必要以上に限定することになり、高等教育の普及においてはマイナスに作用したといわざるを得ない。佐々木徹郎は、良妻賢母主義は「人生60年時代」までの女性のあり方であると指摘している。明治・大正時代は、女性は結婚して子供を5人や6人生み育てるのが普通で、子育てや家事に追われるうちに歳をとり、末の子が結婚するころ本人の寿命も尽きたものである。だが、今や「人生80年」と言われ、一生の間に産む子供の数も1人、2人の現代において、女性には末の子が成人してから少なくとも20年ないし30年の人生が残っている。佐々木は、このような視点から女性の生き方を見ると、良妻賢母主義にとられて家庭の中のみ生きがいを求めるやり方が果たして最も価値のある選択なのかと疑問を呈している<sup>(16)</sup>。

ここで、女子の高等教育の向上をはかって今までにない学校の創立を目指した人物を紹介した

(11) 小河『女子教育事始』、190頁。

(12) 志賀匡『日本女子教育史』玉川大学出版部、1960年、359頁。

(13) 佐々木『大学、女性、家庭教育—評論』。

(14) 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、増補版、1981年、156頁。

(15) 三好信浩『日本の女性と産業教育—近代産業社会における女性の役割—』東信堂、2000年、261—262頁。

(16) 佐々木『大学、女性、家庭教育—評論』、255—256頁。

い。ミッションスクールから始まった私立の女子教育は、次第に良妻賢母の色彩を帯びてきたが、日本における最初の女子高等教育のモデルケースは日本女子大学に見ることができる。その創立者は成瀬仁蔵であり、彼の国家的見地から女子教育を考察した論点は画期的であった。その意味で、日本の女子教育をみるにあたって、成瀬の名前をはずすことはできないであろう。彼は小学校校長や梅花女学校校長を勤めたのち、明治34年（1901年）に東京・目白に日本女子大学を創立し、没するまで校長として日本で最初の女子高等教育機関の草創期の経営にあたった人物である。また、女子教育を今後の日本の教育において重要なものと位置付け、またそれを公の場で明らかにしたという点で、近代日本の女子教育の分野で先駆的な業績を残した人物であるといえる。

成瀬は男子教育と女子教育について、

「しかるに教育と申しますと、すぐさまだれでも男子教育のことより考えないということは、世の通弊であろうと思います。しかし女子教育というものはこの教育の根源である、基礎であります。もちろん教育というものは、家庭教育の本尊たる女子教育から着手しなければ、決して本当の発達はしないものである。根本、基礎を持たないところの教育は架空の教育である。それで女子教育を欠いているところの教育は片輪どころではない、根本、基礎を欠いているところの教育であると思う」<sup>(17)</sup>

と述べており、女子教育を欠いている国は亡国でなければ弱国であろう、でなければ野蛮国であろうと主張している。彼は国民を偉大にしようと思うならば、まずは女子教育から始めるべきであると、当時としては新しい視点を提供している。また、女子教育の振起策として、「第一は教育家自身が覚醒すること。第二は女子教育の方針を確定すること。第三は女子に高等教育をほどこすこと」<sup>(18)</sup>を掲げており、女子教育における高等教育の必要性に言及している。また、女子教育の方針を定めるのに必要な二つの条件として、一つには女性の天性能力というものの研究調査して、女子のよく活動すべき範囲を定めること、二つには国情上、社会的観察を通して将来の日本婦人として働くべき範囲を定めることをあげている<sup>(19)</sup>。彼は、女子教育の方針を以下の3点にまとめており、ここには彼の女性観や広い視野を持って考えた女子教育のあり方についての理念が集約されているといえる。

「第一、女子を人間として教育すること。  
第二、女子を日本婦人として教育すること。  
第三、女子を日本国民として教育すること。」<sup>(20)</sup>

成瀬は、女性自身について、現在あるところの程度よりも高いところを目指し、知力、体力、徳力を高等教育を通してさらに高めることを志向していた。すなわち、その当時の女子教育に対

<sup>(17)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』日本女子大学、1984年、8—9頁。

<sup>(18)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、14頁。

<sup>(19)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、21頁。

<sup>(20)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、22頁。

する弊害を取り除いて、彼の言うところの「完全なる女子教育」を進めたいという意志があった<sup>(21)</sup>。

また、女子教育を施すといっても、まず教育される対象である女子自らの考え方や態度が変わってこなければならない。そのために、成瀬は、女性にとって、第一は「人として自覚を持つ」ことであり、第二には「高く理想に生きる」こと、第三は「国民的人類的に自覚する」という三点が必要であると述べている。さらに、女子が自身の使命を深く自覚しその向上進歩に努力することは、ひいては社会全体や国の興隆にもつながるという広い展望にたった教育理念を発表している<sup>(22)</sup>。この主張は大正7年（1918年）に書かれたものにも関わらず、国家社会の発展に貢献しうる婦人の養成が大学拡張の主眼であると主張しており、非常に先見性に富んでいるといえる。また、ここにナショナリズムに裏打ちされた成瀬の教育思想の一端を見ることができる。

成瀬は、女子が専門教育を受けることに関しても、専門的な技能を身につけることは、母たり妻であることと何ら矛盾するものではないと主張している。これは、婦人に文学や化学などの専門教育を施すと、婦人が傲慢になり、女性の徳を破ることになっては困るとの当時の思想を論破したものである。彼は、本校（日本女子大学）の教育の方針はどこまでも人格を作り、品性を磨くことを基礎とし、その上に専門の知識を築くのであって、「学術を磨いていくのと品性の修養をするということは、少しも矛盾せざるのみならず、この二つは必ず相扶けていかなければよい結果は得られない」と主張している<sup>(23)</sup>。さらに、彼は人格・品性を育成する教育の重要性について、以下のように述べている。

「賢母となり、良妻となるのには、今後は何か専門的の知識があり、同時にまた有機体の健全な細胞として、その分業を全うするという相互扶持、一致協同の品性ができておらなければならないのである。しからばその品性を養い、この技能を得ることは、何によってできるのであろうかという、これは教育の力によるよりほかはない。高等教育はつまり、この資格を人間に与えることを目的とするのである」<sup>(24)</sup>

彼が創設した日本女子大学校は、教育方針として「人格尊重」「向上精神」「自学自習自治活動の精神」「積善濟美」「犠牲奉仕の精神」「研究的精神」「調和の精神」「規律秩序による暢達」の精神を挙げている<sup>(25)</sup>。成瀬が女子の高等教育の必要性を説いたこの明治中期は、女性の地位が男子の下位におかれて軽視されており、男尊女卑の封建的風習が根強かった。このような差別観を受けている女子を一個の人格としてとらえ、人間として男子と同様に高め、社会的に向上せしめることをうたった彼の視点は特筆すべきである。当時の文部大臣であった西園寺公望は成瀬の女子

<sup>(21)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、23頁。

<sup>(22)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、30—32頁。

<sup>(23)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、92頁。

<sup>(24)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『新版 今後の女子教育—成瀬仁蔵・女子大学論選集—』、292—293頁。

<sup>(25)</sup> 志賀『日本女子教育史』、364頁。



教育論に賛成し、女子大学設立に共鳴している<sup>(26)</sup>。成瀬の、女子教育と国家の発展を結び付ける考え、すなわち女子教育が進むことにより、徳を備え、淑女であり、賢母であり、良妻である女性が増えて社会に現れると、社会の改善や教育の普及発達につながり、ひいては日本国の振興につながるという考えは、画期的なものであった。当時の政治家の理解を得たことから、彼の女子教育思想が広く社会、国家の発展につながる進取的な卓越した理念であることを表しているといえよう。

ここで、明治・大正期に活躍した教育者を何人か紹介したい。彼らの女子教育に関する思想をみることにより、その時代の女子教育に対する要請と彼らの独自性について検討したい。まず一人目は、女性向けの啓蒙雑誌として有名な『女学雑誌』の創刊者である巖本善治である<sup>(27)</sup>。彼は、明治期中期に女子教育において啓蒙的な発言をした教育者の一人である。巖本は女子教育を単に婚姻のためのみの教育ではないとしている<sup>(28)</sup>。彼は女子のあるべき姿について以下のように述べている。

「女子は到底妻母となるべきものなり。即ち一人の妻母となるか、一国の妻母となるか、天下の妻母となるべきものなり。一人の妻母となりては能く夫を助けるを教ゆるべし。一国の妻母となりては慈善の事、看病の事、経済の事、美術の事、教育の事、伝道の事などに尽力すべし。天下の妻母となりては国と国との戦争を防ぎ万国の平和を維持し天下に一視同仁の愛情を満たすべし」<sup>(29)</sup>

このように、女子を妻母と見るのだが、儒教的女子観が描く、家庭内のみの「良妻賢母」とは本質的に異なり、女子を世界に開いた存在として位置付けている。これは、当時の女子教育観として画期的なものであったといえよう。

次に、慶応義塾大学の創立者である福沢諭吉の女子教育に関する思想についてみていきたい。福沢も、明治初期から自己の著書を通して婦人論や女子教育論をいくつか主張してきた。そこで出版した『女大学評論』では、かつての『女大学』論を徹底的な男尊女卑の考えであると批判し、男女は異なるが、その間に高低や尊卑の差はないとしている。またこの趣旨を受けて、『新女大学』では全23条にわたって女子の教育を論じている<sup>(30)</sup>。まず、男女の同等性を強く説き、学問教育においては女子も男子も相違なしと主張している。さらに、女子には女性としての天分と特性があることを述べ、女子固有のしつけや教養の必要性を説いている。すなわち、それらは家庭生活の基本的能力や、結婚、育児についての心得や母性の偉大さの自覚などのことであり、これらを身につけることは女子自らの利益になるばかりではなく、男子や生まれてくる子孫の利益にもつながるとした。つまり、彼は、男女平等の立場を堅持しながら、女子としての生理的及び心理的

<sup>(26)</sup> 村田鈴子『教育女性学入門』信山社、1990年。

<sup>(27)</sup> 『女学雑誌』は明治18（1885年）7月から明治37年（1904年）2月まで発行され、『女学新誌』から分かれて創刊された。女性の啓蒙・向上を目ざし、婦人解放運動に重要な役割を果たしたと言われている。

<sup>(28)</sup> 碓井知鶴子『女子教育の近代と現代—日米の比較教育的試論—』近代文藝社、1994年、63頁。

<sup>(29)</sup> 巖本善治『吾党之女子教育』、明治女学校、1892年、8頁。

<sup>(30)</sup> 林望監修『福沢諭吉 女大学評論・新女大学』、講談社学術文庫、2001年。



特性に応じて女子を教育すべきであるという思想を持っていたといえる。この男女同等の理念と女性特有の教養の重視は、近代自由主義的な社会啓蒙の運動家でもあった福沢独自の視点といえよう。

最後に、小原国芳について簡単に紹介する。小原は「全人教育論」の提唱者であり、玉川学園を創設した教育者として知られている。彼は、大正時代の婦人解放問題について、男女の別は性の別であって、生の本能の質、力、および尊厳の差ではないと男女平等の立場に立っている。また、女子教育に関しては、男子は男子、女子は女子と、そのおかれた使命は異なるが、価値に差があるのではなく、女子の根本性質を尊重した教育方法が必要であると主張している<sup>(31)</sup>。彼の思想は、男女平等の立場に立ちつつも、それぞれの特質を尊重した教育を志向する福沢の持つ教育観と共通する部分があるといえる。彼は、他の教育学者に先駆けて男女共学を提唱したという点で注目されており、男女平等のみならず、男女共学にまでその教育思想を進めたという点で当時の教育学者としては先見性があったといえる。

### ③ 戦後の女子教育

明治から大正にかけて、制度としての教育は常に国家繁栄のための手段として使われる側面があり、この教育の中では女子教育はいつも、いわゆる良妻賢母の枠内にとどまっていたといえよう。だが、戦後の女子教育は昭和22年（1947年）に公布された教育基本法によって男女平等の教育を志向することとなる。教育基本法の第三条では「すべて国民はひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって教育上差別されない」として一切の教育上の差別を否定した<sup>(32)</sup>。さらに第五条では「男女は互いに敬重し、協力し合わなければならないものであって、教育上男女の共学は認められなければならない」と男女共学を定めた<sup>(33)</sup>。そして、戦前の女性に対する教育上の差別を反省し、女子教育の向上をめざした。これによって教育の上の男女差別も否定され、戦後はじめて男女平等教育の内容が具体的に方向づけられたといえる。この教育基本法は、明治維新以来の男女の教育における機会の不平等を廃し、男女同等の教育を保障すべきであるとうたっている点において、非常に画期的であるといえる<sup>(34)</sup>。

次に、戦後の女子高等教育についてみていきたい。第二次世界大戦後、女性に高等教育の門戸

---

<sup>(31)</sup> 小原国芳『小原国芳全集〈第10〉 婦人問題と教育、結婚論、日本女性の理想』玉川大学出版部、1963年。

<sup>(32)</sup> 五十嵐頭「四 教育の機会均等」、宗像誠也 編『新装版 教育基本法』所収、株式会社新評論、1966年、104頁。

<sup>(33)</sup> 城丸章夫「六 男女共学」、宗像誠也 編『新装版 教育基本法』所収、株式会社新評論、1966年、165頁。

<sup>(34)</sup> この「男女共学」をうたった第五条は、2006年に改正された教育基本法には入っておらず、第二条「教育の目標」の二「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。」に男女の平等が入っているのみである（浪本勝年・三上昭彦 編『「改正」教育基本法を考える—逐条解説[改訂版]』北樹出版、2007年、116頁）。

が広く開放され、教育機会の男女平等が確立された。昭和23年（1947年）に新制大学制度が発足し、日本女子大学、津田塾大学、東京女子大学、聖心女子大学、神戸女学院大学の五校の女子大学が認可されて以来、女子大学は1960年代後半まで大幅に増加を続けており、その後も多少の増減を繰り返しながら現在に至る。当時は、女子教育が注目され、主として婦人運動家や啓蒙家たちによる家族制度の批判や新しい女性の生き方を示唆する啓蒙書が相次いで出版された。女子高等教育の社会的背景として、これらの世相は女子教育の改善にも反映したようであるが、実際にはどうであろうか。ここで、戦後に発表された女子教育研究の分野やその変遷に目を向けてみたい。特に教育原理に関するものとしては、谷村信竹の論稿がある。彼は、女性の人間としての普遍性・基本的人権の自覚が、まず女子教育の根本にあるべきであるが、同時に女性の特性として、受胎、妊娠、分娩、育児などの生理的特質が重視され、家庭生活の整理、維持、管理が女子に適した活動であり、「家庭科」に見られる事項が女性の使命にふさわしいとしている<sup>(35)</sup>。このような考え方は戦前の女子教育論と何ら異なることはなく、彼が戦後目覚ましい変貌を見せた婦人の社会的独立活動について懐疑的であった部分が読み取れる。

さらに、1966年の中央教育審議会によって提出された「期待される人間像」では女子に対する教育的配慮について以下のようにまとめられている。

「後期中等教育機関の拡充にあたっては、女子に対する教育の機会を、男子と均等に確保されなければならないが、その教育の内容については、女子の特性に応じた教育的配慮も必要である。そのため、高等学校においては、普通科目についても、女子が将来多くの場合家庭生活において独特の役割をこなすことを考え、その特性を生かすような履修の方法を考慮する。また、今後における女子の社会的な役割の重要性にかんがみ、その社会性を高めるための教育指導を行なうとともに、女子の特性に応じた職業分野に相応する専門教育の充実を図る。」<sup>(36)</sup>

ここでは、産業社会が女性に割り当てた役割を、職業人としてというよりは家庭を守る良妻賢母として果たしていく役割が奨励されており、教育基本法によって志向された戦後の男女平等・男女同質教育も再び見直しを迫られることになった。

戦後、女子高等教育は著しい発展を遂げたが、女子の受けた教育や、そこで獲得したスキルや能力の社会的還元が有効になされていないとの指摘があり、これが昭和35年（1960年）頃から世論をにぎわせた「女子学生亡国論」につながっていく。「女子学生亡国論」の論点は「（1）女子学生の急増により学問的レベルが低下し、学問研究を進展、継承させる人材の養成が困難になったこと、（2）大学で学んだものが社会的に還元されずに失われていく恐れがあること、（3）女子学生の経済力に限度があり、私立大学を財政的に支える助けになり難い」という3点に集約されている<sup>(37)</sup>。また、結婚のための一般教養を目的にする女性が、入試の学科試験の成績が良い

<sup>(35)</sup> 谷村信竹「女子教育の理念の確立と女子の本分について」『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』、1958年。

<sup>(36)</sup> 昭和41年、文部省中央教育審議会第20回答申「後期中等教育の拡充整備について」、1966年。

<sup>(37)</sup> 藤井治枝編『日本の女子高等教育』ドメス出版、1973年、71頁。

ということで大量に入学し、そのぶん将来職業に就くべきである男子を締め出しているという問題もあり、これは社会人の養成を目的とする大学の機能不全につながるという議論もあった。つまり、せっかく大学に入っても、結局家庭に入り、家事・育児に専念することになれば、男性と同じ高度の教育を与えることは社会の余計な出費となり、国を減ぼすことになるという主張である。この「女子学生亡国論」が広まった結果、昭和46年（1971年）4月に熊本大学の柳本学長は「女子学生の入学を制限する」という爆弾的発言をおこない、具体的には、熊本大学、富山大学、九州大学の薬学部において女子の入学制限がなされることとなった<sup>(38)</sup>。

このように「女子学生亡国論」は、今から考えると明らかな女性差別の発言を生み出したのであるが、当時は大学側の男女差別を正当化する口実となっていた。この問題は、女子学生のあり方のみが問題にされ、すべて女子学生の責任であるかのように解釈されがちであるが、女子学生の学力や経済力だけではなく、その背景となる社会的諸条件も考慮に入れなくてはならない。すなわち企業の女性労働力の利用の仕方、中・高年層や既婚女性の職場からの追い出しなどさまざまな要因を加味して検討する必要があるということである。つまり、高等教育を受けた女性がその教育成果を職業を通じて社会に還元しようとしたとき、それを妨げる要因が社会にいくつか存在する。たとえば、我が国に古くからある女子の労働全般に対する偏見や、特に高度な専門的職業での女性進出に対する需要と供給のアンバランスがある。また、女性の育児と就業の両立を援助する社会的な配慮の著しい不足があり、また「男は仕事、女は家庭」という性役割分業をよしとする家庭観、育児観が蔓延していることがあげられよう。藤井治枝氏はこのような価値観を乗り越えて、女性が人間らしい生活を創造していくために、社会自体の変革を訴えている<sup>(39)</sup>。

次に、当時の女子教育のあり方や問題点について検討していきたい。日本の女子教育は、1960年代までは従来社会人として教育される機会が男子よりも少なく、良妻賢母思想に見られるようなよき母、妻としての教育は重視されても「一人前の社会的責任を自覚させることや、その責任を果たすとともに与えられた権利を正当に行行使する意識と技術を教えられること」は非常に少なかったと言える<sup>(40)</sup>。結局このような女子を育てた結果どうなるのか。その女子が結婚して母となり、子育てをするとすると、彼女が受けたある意味男性とは異なった教育観により、子供に対して男女平等の子育てを行うことが困難になる。つまり、男子も女子も社会的正義感や道徳観を等しく持つことは難しくなってしまうのである。このような女子教育の抱える問題点も指摘された。

『日本の女子教育』の中で、天羽太平や一番ヶ瀬康子など日本女子大学で教鞭をとる教授らは、「これからの女子教育」と題して座談会を開き、そこで、女子教育の置かれている問題、またこれからの女子教育の目指すべきものについて言及している。たとえば、女子の能力が正当に評価されていないという点については、女性には自然科学的なものは必要ないという教育方針が、家

<sup>(38)</sup> 村田『教育女性学入門』、130頁。

<sup>(39)</sup> 藤井治枝編『日本の女子高等教育』。

<sup>(40)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『日本の女子教育』、30頁。

庭にも社会にも存在したのではないかという根本的な問いが見られた。また、過去の女子の教科書を見ても、女子に創造性を要求するものはほとんど見られず、知能指数には男子と女子と差がない（やり方次第では女子の方が高いこともある）のにも関わらず、女性には数学的な頭が全然ないから教える必要がないという考えが存在していたと言われている<sup>(41)</sup>。そのような女子の成長、向上を妨げる意識や雰囲気が、まだまだ社会全般のみならず、女子を育てる母親にも見られたのが、1960年代であるといえる。このような様々な問題をふまえたうえで、彼らは女子教育の目標として以下の三点をあげている。一点目は、教育における男女差別をなくす必要があること、二点目は女子の基礎教育を徹底的に行う必要があること、三点目に女子の体力作りやそのための設備と奨励の必要性がある、ということである<sup>(42)</sup>。この本は今から40年も前のものであるが、女子の生き方についても「よき母親」としてだけでなく、「よき社会人」「よき市民」として、自分の個性と能力を活かして積極的に生きていくべきであるという主張がなされている。さらに、働く母親のために保育施設の完備や再就職を可能にするような職場の体系の必要性にもふれている。これらは、女子を「人間として、日本婦人として、日本国民として」教育するという理念を主張した、創立者である成瀬仁蔵の教育理念が反映された、日本女子大学ならではの画期的な視点といえる。

同じく、日本女子大学の青木生子は女子大学の果たすべき役割について、いわゆる花嫁修業的な昔ながらの良妻賢母主義的な女子大学からは脱皮すべきであると主張し、女性自身の意識を高め、潜在能力を開発していくべきであると述べている<sup>(43)</sup>。神戸女学院大学の上野輝将は、女子高等教育について、男性エリートと張り合う女性エリートのための教育には気が進まないと述べている。それよりも、「普通」の女性が、男性と同等の市民として、主体的に社会参加できるようになること、その手助けとなる教養教育に力を入れることが大切とし、そこに女子教育の価値を見出している<sup>(44)</sup>。女子教育について考えるとき、優先的に問題になるのは、女子学生を取り巻く社会構造である。ジェンダー非対称な社会の中で、どうやって彼女たちの能力を見出し、社会に還元できる力を育てていくか。彼の視点は教養教育を女子教育において行うことの意味を改めて意義付けたものといえる。

ここで、女子教育のメリットとは何かについてみていきたい。日本女子大学生の意識調査によると、「女子大学を選んだ理由」として「女性が自分の個性や能力を伸ばしやすい」という意見が多く見られた<sup>(45)</sup>。男女共学ではなく別学であることのメリットとしては、男子学生を必要以上に意識したり、男子の存在に委縮することなく、女子が自身の能力をのびのびと開花させること

(41) 日本女子大学女子教育研究所編『日本の女子教育』、109-110頁。

(42) 日本女子大学女子教育研究所編『日本の女子教育』、119頁。

(43) 青木生子「女子大学の現代的意義」、日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論 女子教育研究双書⑩』所収、ドメス出版、1995年。

(44) 上野輝将「現代日本の女性と教養教育—「教育危機」論の中から考える」神戸女学院大学文学部総合文化学科編『神戸女学院大学総文叢書6 女子教育、再考』所収、冬弓舎、2006年、182頁。

(45) 日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論 女子教育研究双書⑩』、161頁。

ができること、自律性が高まること、広い意味での自信を持たせることが可能なことなどがあげられる。具体的には、「女子だけの方が男子の目や反応を気にしないでありのままの自分が出せ、のびのびと学べると思う」「共学だと男子に甘えて頼ってしまい、自分一人で物事を判断したり、実行するチャンスが減ってしまうと思う」など、男子がいないことによる女子のみの環境の良い面に着目した意見が見られた。また、「やはり“女性同士”であると気が楽だから」という回答もあった。

このような「女子大学では、女子の自立心を養成でき、思う存分リーダーシップを発揮できる」という考えはいくつかの研究でも見られる<sup>(46)</sup>。また、これらの回答を裏付けるものとして、日本女子大学では「別学を通して男女平等の意識に立ち、女性のユニークな能力や個性の開発をめざす」という点を根本の教育理念に置いている<sup>(47)</sup>。だが、社会に出たときに、女子だけの世界というものはないので、女子大学という男性のいない場で培われた自立心が、そこで通用するのといった問題は常に考えられるべきであろう。すなわち、女性だけの環境で育まれる能力が、男女がともに生きている社会でどのように発揮されているのかについても検討の余地があるということである。それをふまえても、女性だけの環境で育まれた能力や個性が、その後の人生の土台を築き、その人の自信になって、社会へ出たときに大きな力になることもあるであろう。このように「共学にはない女子大学で可能なこと」として「自分の個性や能力を伸ばしやすい」「女性が堂々と声を出して生きていける」という点は、女性の能力の開発・発揮の場としての女子教育機関の存在根拠として非常に大きいといえる。

## 2. 創価一貫教育における女子教育

ではここで、池田の創立した二つの教育機関である、創価女子中学・高等学校と創価女子短期大学について、その設立の系譜と、教育思想について検討する。創立者である池田の発言・スピーチをひきながら、彼がどのような女子教育を志向していたのかに着目していきたい。

### ① 創価女子中学・高等学校

まず、創価女子短期大学・女子高等学校の設立構想について紹介したい。池田は昭和44年(1969年)7月に日大講堂において、創価大学の設立に関連して以下のように発表している。「創価大学に関連して、仮称・創価女子短期大学、創価女子高等学校を新設する予定があることを発表します。創価大学へ進学するのは自由ですが、二年間で卒業したいという女性のために女子短大を、また創価女子高等学校は、東京の創価高等学校に対応して、それぞれ設立し、社会へ有為な女性リーダーを輩出していきたいと思っています」<sup>(48)</sup>。

<sup>(46)</sup> 利谷信義・湯沢雍彦・袖井孝子・篠塚英子編『高学歴時代の女性』有斐閣、1996年；佐々木『大学、女性、家庭教育—評論』；神戸女学院大学文学部総合文化学科 編『神戸女学院大学総文叢書6 女子教育、再考』。

<sup>(47)</sup> 青木生子「女子大学の現代的意義」、18頁。

<sup>(48)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』創価女子短期大学 学生会、2004年、43頁。

また、創価女子中学・高等学校の落成式において、池田は以下のように述べている。

「国家主義的な目的な、良妻賢母のみを理想像とする桎梏からのがれえた教育界は、最近、とみにこの人間教育に視点を向けてきております。だが、ヤングの無軌道な実態をみれば、社会がそれに気づいてはいても、現実には与えるべき何物をももたないといえるのではないのでしょうか。人間主義の教育理念を根幹とする意欲的な教師と、情操豊かな教育環境がそろう、創価女子教育は、まさに真実の人間教育を成し得る、唯一の希望であると信じます」<sup>(49)</sup>

ここに、彼のもつ女子教育の理念が集約されているといってもよい。つまり、国家主義的でもなく、良妻賢母のみを理想とするのでもない「次代の女性育成と豊かな文化創造」を志向しているのである。ここでいう次代の女性、新しい女性像とは、「社会に有為な女性リーダー」としての資質を示唆している。また、第一回入学式では「現在における最も澁刺たる学園」「人間陶冶の最も理想的な学園」「学び得た知識が人生の知恵として生きる学園」をつくってほしいと述べており、池田の初めての女子教育機関への期待は非常に大きかったことがうかがえる<sup>(50)</sup>。「何のため」の教育という点から考えると、彼の用いる人間主義という言葉に表されるように、「人間」のための、「人間」に立脚した女子教育を目指していたといえ、ここに池田独自の観点を見ることができる。

昭和48年（1973年）4月11日に大阪・交野において創価女子中学・高等学校の第一回入学式が行われた。創立者である池田は「良識」「健康」「希望」のモットーをふまえたうえで、「伝統・平和・躰・教養・青春」の五項目にわたって指導を行った。ここで「躰」について池田は、若いうちからきちんとした躰を受けることは、人生をよりよく生きるために必要であると言及している。学園時代に日々行われる訓練や躰も、本番の人生の縫い上げが立派で見事であるためであり、池田はこのような礼儀作法や生活リズムといった躰を身につけた女性の育成を求めていたと見ることができる。また、「教養」についても「私は、みなさんが好奇心のままに、現代のはんらんする情報に、いたずらに流されることがないように、たとえ小さなことでもよいから深く心がけて、真に教養ある奥ゆかしい女性として巣立っていかれますことを望んでやみません」と語り、勉学を通して身につけた知識や、そこで培われる人格が教養となり、そこではじめて知識を生活の知恵とすることができると述べている<sup>(51)</sup>。中学・高校時代から単に知識の習得だけではなく、それをふまえたうえでの豊かな教養や人間性を志向している点は、いかに彼がこの女子学園の教育に期待を寄せ、女子生徒に多くの資質を求めていたかを物語るといえよう。

また、「他人の不幸のうえに自己の幸福を築かないという信条を持つてほしい」と、「幸福とは何か」について一つの人生観を提示している。また、学園時代を通して人間として、女性としての確固たる“芯”を養っていくことの重要性を強調している<sup>(52)</sup>。このときの指導は、のちにこ

<sup>(49)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』学校法人創価学園、1982年、220頁。

<sup>(50)</sup> 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年、53頁。

<sup>(51)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、229頁。

<sup>(52)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、225頁。



の創価女子学園に流れる精神的基盤となっていた。

次に、池田が与えた3つのモットーについてみていきたい。昭和50年（1975年）の創価女子中学・高等学校の第3期生の入学記念撮影会において、池田は「良識」「健康」「希望」という3つのモットーについてふれている<sup>(53)</sup>。ここに、池田の女子教育の思想の一端を見ることができるといえる。まず池田は「健康」について、健康は、人生を生涯にわたっていくうえで最も基礎となるものであり、「幸せの基礎」であると述べている。つまり、どんなに財宝があっても、いかに名誉があっても、いかに有名であっても、健康でないということは、不幸であるということである。二つ目の「良識」についてであるが、池田は「良識は、即、聡明であり、人間として人間らしく生きる、もっとも基本の姿であります」と述べ、聡明で良識ある人は、どんなことがあっても揺るがず、自己の信条をしっかり持って、乗り切っていけると語っている。最後の「希望」については、女性の人生の路線を考えた場合に、どんなことがあったとしても、必ず希望を持って立ち上がる、希望を持ち続ける強さが大切であると訴えている。第7回入学式においても、「どんなことがあってもくじけずに、前途に希望を生み出していける人が、人間としてもっとも尊い人です」と述べており、このように、池田は「良識・健康・希望」をどれも女性が備えるべき特質として欠かすことのできないものであるとしていた。

創価女子中学・高等学校の開学当時の様子は、『希望の乙女』という開学一年目のあゆみについて掲載されている文集からうかがうことができる。希望の乙女とは、池田より寄贈されたブロンズ像であり、昭和48年（1973年）の9月に除幕式が行われた。これは、どんなことがあっても負けない、くじけない心を持ち、生涯希望を持ち続ける女性の一つの理想像を示しているともいえるよう<sup>(55)</sup>。また、卒業生の書いた『この道—希望と栄光の歴史—』では、開学時より昭和55年（1980年）度までの池田の指導の様子や当時の池田と女子生徒との交流についてまとめている<sup>(56)</sup>。創価女子中学・高等学校の生徒は当時、創立者である池田のことを「おとうさん」と慕う一面もあり、池田も生徒たちをわが娘のように可愛がっていた。あるときは、食堂で生徒と食事をともにしながら、一人ひとりの健康を気づかたり、生徒との交歓会では、池田自身が生徒のためにピアノを弾いたりということもあった。さらに、池田がヨーロッパに訪問した際のおみやげとしてフランス人形を贈ったり（この人形は学園の園の字をとって「園子」と名づけられた）、「モナ・リザ」の絵画の複製や美術工芸品を贈ったり、ロシアや中国など海外を訪問した際のおみやげなども、ことあるごとに学園に贈られた。文集『この道—希望と栄光の歴史—』を読むと、そのような創立者からの激励は当時の女子生徒の心に深く残っていることがうかがえる。特に、開学1年目には池田は合計7回も創価女子中学・高等学校を訪問しており、そのたびに女子生徒に対し

<sup>(53)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、261頁。

<sup>(54)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、250頁。

<sup>(55)</sup> 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会編『希望の乙女—創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年、巻頭。

<sup>(56)</sup> 関西創価学園 堂会『この道—希望と栄光の歴史—』、2006年。



て心からの指導や激励を行っていた<sup>(57)</sup>。東京にある創価学園（男子校）では、創立者と生徒は「師匠と弟子」であり、「父と息子」という視点ではあまり語られることはなかったことから見ると、このような「父と娘」の絆は、創価女子中学・高等学校独特の精神ともいえる。

## ② 創価女子短期大学

創価女子短期大学は、昭和60年（1985年）に東京・八王子に経営科・英語科の2学科で開校した。建学の精神は「知性と福德ゆたかな女性 自己の信条をもち人間協和をめざす女性 社会性と国際性に富む女性」となっており、女子教育の最高学府として、社会に有為な女性リーダーの養成をめざしてつくられた。現在創価一貫教育の中では唯一の女子教育機関となっている。もともと、創価女子短期大学は創価女子学園と同じ関西の地に設立される予定であった。先にも述べたように、昭和44年（1969年）に昭和48年（1973年）の開学を目指し、創価女子短期大学、創価女子高等学校を開校したいとの設立構想が発表された。実際には関西には中学・高校が開学し、1982年に創価大学創立15周年記念事業の一環として、創価大学内に短大を建設することが決定した。創価女子短期大学の開学当時は全国に500余りの短期大学があり、その6割が女子短期大学であった。

昭和60年（1985年）3月19日には短大の落成式が行われ、池田は創立者としてテープカットにのぞんだ。同年4月3日には開学記念の祝賀会が開かれ、2日目の4日には教育関係者、経済界、各国大使館の参事官らが出席した。4月9日には第1回入学式が開催された。そこで池田は祝辞として「高貴にして崩れざる道を後輩のためにつくっていただきたい」と念願し、「理想」「鍛え」「教養」の人にとスピーチした<sup>(58)</sup>。特に、三点目の「教養」については、「正しきものを正しく見、美しいものを美しく見ていける、清らかな広々とした健全な心」を養ってほしいと訴え、それが「真の教養」であると結んだ<sup>(59)</sup>。

池田は、「私の人生最後の事業は教育である。人材の育成は、二十一世紀のために最も重要な課題である。短大の設立もそのための偉大なる前進です。また、私立大学の独自性は『建学の精神』にある。『建学の精神』こそが大学の魂である。ゆえに、どこまでも『建学の精神』に則り、教職学が一体となって短大の新しい伝統を築いてください。これが創立者の願いです」と述べており、開学時に提示した3つの建学の精神の重要性を強調している<sup>(60)</sup>。

第2回入学式では「心清く、心優しく、そして心強き乙女たれ」とのメッセージを残し、心をみがくことについて主眼が置かれていた。第3回入学式では“人間としての美しさ”に言及し、それは「生命の中にある『清らかな心』『品格』『教養』によって輝いていくもの」として

<sup>(57)</sup> 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年、53頁。

<sup>(58)</sup> 学校法人 創価女子短期大学『創価女子短期大学 20年誌 誉れの青春』創価大学、2006年、25頁。

<sup>(59)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』創価女子短期大学 学生会、2004年、39頁。

<sup>(60)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、47頁。

いる<sup>(61)</sup>。このように、池田は女性に対して、外見だけの表面的な美のみを追いかけるのではなく、内面を磨くことの大切さ、もう一步深い次元から真の美をとらえることの重要性を指摘している。

池田が創価女子短大生に向けて送ったメッセージとして、特筆すべきものは平成14年（2002年）10月1日の短大特別講義であろう。この日は事前に学生には知らされていなかったが、池田が来学し、開学以来の念願であった、初の創立者自らによる特別講義が行われた。彼は、フランスの作家モーパッサンの『女の一生』を通し、「学問と人生と幸福」について講義をした。池田は「勉強は、幸福になるためです。人生の目的も、学問の目的も幸福になるためです」と述べ、幸福を追求する方法として、学生の本分である勉学の重要性を説いている<sup>(62)</sup>。

また、平成20年（2008年）2月に聖教新聞で全6回にわたって連載された創価女子短大生への特別文化講座「永遠に学び勝ちゆく女性 キュリー夫人を語る」では、「正しき人生」「幸福の人生」「勝利の人生」とは何かについて、キュリー夫人という一人の女性の生涯を通して語っている。池田は「マリー・キュリーの偉大さは、二つのノーベル賞を取ったということよりも、『悲哀に負けない強さ』にこそあると思う。順風満帆の人生など、ありえない。むしろ困難ばかりです。それを乗り越えるには、自分の使命を自覚することです。そこに希望が生まれるからです」と述べながら、女性としても「強く」あることの大切さ、また「負けない」人生の意義について強調している<sup>(63)</sup>。

池田が創価女子短期大学に向けてのまなざしをつづったものに『随筆 新・人間革命』の「輝け 女性教育の幸福城」がある。この随筆で池田は創価女子短期大学設立構想から開学までの流れについて述べている。そこで、池田は「私たちがめざす根本の目的は『平和』の二字である」と平和を築く女性リーダーへの志向性を明確に示している<sup>(64)</sup>。この教育の目的を最終的に幸福、また大きく平和へと結びつける視点は、他の女子教育論には見られない池田思想の大きな特徴の一つといえる。

ここで、池田が、女性の特質として、直視の鋭さと真の教養について言及している点についてみていきたい。池田は、女性の持つ特質として、現実主義に立脚した直視の鋭さを指摘している。彼は女性は家計のやりくり、子育て、家事などに追われ、現実的にならざるをえないが、それだけに、「正しいものを正しいと見定め、美しいものを美しいと直感していけるのは女性の特質の智慧」であり、こうした特質を池田は「真の教養」と表現している。またこうした「真の教養」を備えた女性が二十一世紀の主役になった時に“平和と文化の新時代”が訪れるのであらうと述べている<sup>(65)</sup>。

続いて、池田がどのような女性を理想としていたのかについて、彼のスピーチを通して探って

<sup>(61)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、59頁。

<sup>(62)</sup> 学校法人 創価女子短期大学『創価女子短期大学 20年誌 誉れの青春』、109頁。

<sup>(63)</sup> 「特別文化講座」編集委員会編『創価女子短期大学 特別文化講座』創価女子短期大学、2008年、12頁。

<sup>(64)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、10頁。

<sup>(65)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、39頁。

いきたい。池田は開学当初に、理想の女子学生について以下のように語っている。「短大では、優雅で品格があり、豊かな教養があり、礼儀正しく、心が鍛えられた、知性と福德あふれる、すばらしい学生を育成したい」<sup>(66)</sup>。また、創価女子中学・高等学校での語らいで、彼は「女性は、月の出てくる瞬間の輝きのような気品のある人がよい」と述べ、女性には「英知、教養そして気品が大切」と述べている<sup>(67)</sup>。このように、女性の特質として「教養」「品性」に着目している点も、池田の女子教育に関する一つの特徴といえよう。

また、女性は、「負けないこと」が何よりも大事であるとの指導のなかで、決して周りの環境に振り回されて自己の中心軸を見失うことがあってはならないとし、何があっても揺るがない、負けない自分自身を短大時代に築くことが肝要だと強調している<sup>(68)</sup>。

池田は「天の半分は女性である。その女性を教育することは、家庭を教育し、社会を教育し、国家ひいては世界を教育することに通じていく。女性がいかにもその特質を生かし、自己の可能性を開いていくかで社会は決まる。女性が力を持てば、戦争は起こらない」と述べるように、平和構築に対する女性の役割の重要性についても言及しており、女性の存在価値の大きさを強調している<sup>(69)</sup>。平成18年（2006年）に出版されたエリース・ボールディング博士との対談集『「平和の文化」の輝く世紀へ！』の中でも、女性こそが平和の創造者たりうるという同様の指摘があり、池田の女性に対するまなざしは、年月を経ても一貫しているといえる。

昭和62年（1987年）3月19日の第一回卒業式で、池田は創立者として謝恩会に出席した。彼はことあるごとに、女性には幸福になってもらいと記しているが、この卒業謝恩会において、幸福と知識、学問について述べている。池田はまず「私の心情は、ともかく皆さんに幸福になっていただきたいということである」と述べたうえで、「学問、知識は当然、大切である。しかし、知識イコール幸福ではない。学問、学歴と人生の幸福とは別次元の問題である。これを錯覚し、混同してはいけない」と語っている<sup>(70)</sup>。つまり、どんなに知識があっても心がおごったりしてしまえば、幸福につながることはなく、それは真に教養のある人の姿とは言えないということである。また「女性としての強い“芯”を持ちつつ、謙虚さの中に美しい品格と知性の輝く人であってほしい」と結び、心の美しさの大切さを強調している<sup>(71)</sup>。知識イコール幸福ではない、と言っているにもかかわらず、池田は知性の大切さについても以下のように語っている。平成2年（1990年）のアメリカの当時の創価大学ロサンゼルス分校での短大生との懇談会で、池田は「人間にとって一番大事なのは英知であり、知性です。人生は知性の戦いです。知性がなければ勝てません。また、リーダーにもなれない。知性が大事です。」と語り、このうえ

<sup>(66)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、45頁。

<sup>(67)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、377頁。

<sup>(68)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、40頁。

<sup>(69)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、45頁。

<sup>(70)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、62頁。

<sup>(71)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、63頁。

ないほど知性の重要性を訴えている<sup>(72)</sup>。このように、彼は知性を鍛えることについてはむしろ厳しい姿勢を持っていたといえる。

池田は創価女子中学・高等学校の第5回希望祭において「本当に立派な人はどういう人か。努力すべき時に努力する、忍耐をすべき時に忍耐ができる人です」と説き、人生における忍耐と努力の重要性を説いている<sup>(73)</sup>。また、創価女子短期大学12期生との記念撮影会の際にも、池田は「忍耐の二字にかなうものなし」として忍耐を持って進む者は無敵であると述べている<sup>(74)</sup>。上記をまとめると、池田は女子教育において、知性や幸福についての揺るがぬ価値観を形成することを重視していたといえる。さらに、女子に対しても現実の生活においても努力と忍耐を持って進んでいくことの大切さを述べており、人間としてより高い精神性を求めていたといえる。

### 3. 池田の教育思想の考察

#### ① 他の教育思想との関連性

ここで、池田の教育思想と先に述べたような、日本の女子教育における教育思想との関連性についてみていきたい。まず、池田の人間主義・生命尊重の精神は、日本女子大学の創立者である成瀬仁蔵の教育理念とも相通する点があるといえる。成瀬は女子をまず「人間として教育する」ことを第一義にした。人間としての教育とは「心身の能力を開発せしめ、人間として欠くべからざる資質を備えることにあり、人間尊重と個人の特性に応じた教育によって、内発的・自立的な人間となることを期待するもの」である<sup>(75)</sup>。ここでいう人間尊重の精神は、池田の教育思想を通して強調されている生命尊重の精神にも見ることができよう。

また、生徒の人格を尊重するという点においても、池田の思想と成瀬の人格教育論との間に共通点が見られる。成瀬の人格教育論では、白らの人格は白らが形成するという前提がまずあり、教育はそれを助ける営みであり、学生一人一人の人格が尊重された。その中で、人格形成に向かう個人がどのように視野を広げ、自力によって成熟していくかという教育・成長過程を重視した<sup>(76)</sup>。池田も、教育においては子どもであっても一個の人格として尊重し、働きかけていくことが大切であるという点について述べている<sup>(77)</sup>。池田は、人生においては人間性、人格といったものが何よりも大事であり、それを観念ではなく、人間同士のふれあいや体験を通して身をもって会得することが何よりも重要であると強調している<sup>(78)</sup>。さらに、どのような形で人格が陶冶がされるのが望ましいかについて、彼は、中学・高校時代に良き先輩について良き伝統を作り、自分自身を築くことの意義についても述べており、生徒にとって自らを高めることのできる教育

<sup>(72)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、191頁。

<sup>(73)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、279頁。

<sup>(74)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、97頁。

<sup>(75)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論 女子教育研究双書⑩』、20頁。

<sup>(76)</sup> 日本女子大学女子教育研究所編『女子大学論 女子教育研究双書⑩』。

<sup>(77)</sup> 池田大作「子どもの人格を尊重する家庭教育を」『婦人倶楽部』昭和40年11月号所収、講談社、1965年。

<sup>(78)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、241頁。

環境の重要性を説いている<sup>(79)</sup>。成瀬、池田ともに、両者の思想には個の成長を期待する一人一人の生徒（学生）への信頼がその核となっていることがうかがえる。

次に、女子教育の利点について検討する。利谷信義ら編著の『高学歴時代の女性』では学生、大学側双方があげた女子大学の良さの理由を以下の三点に集約している。一点目は女子学生だけの教育集団であるがうえに女性がのびのびと、しかも主体的に活動できること、二点目に女子大学、女子短期大学は概して小規模校なので、個別のないし少人数制の教育をおこなうことができること、三点目に、依然として男性中心的社会と男性中心な教育システムが存在する中では、女性がそのような男性中心のシステムに埋没ないし従属することなく自立的に学び生きていく力を身につけるのには、共学校よりもむしろ女子校の方が適していることである<sup>(80)</sup>。

創価女子短期大学開学時から学生部長、参与を務めてきた佃操氏によると、女子のみの教育環境のよさとしては、上にあげたような、女子がのびのびと、しかも自立的・主体的に活動できることや、4年制大学に比べて小規模なことにより、教職員と学生の間関係が密接になり、2年間で4年に匹敵する教育成果を上げることができる点をあげている。このように、女子教育の利点という点で、創価女子中学・高校、創価女子短期大学と他の女子教育機関との関連性を見ることができる。

池田も、創価女子学園や短大の教育環境で育まれる友情や、切磋琢磨を通してみがかれるべき利他の精神についてもふれており、それらは以下のような卒業生に贈った詩にみることができる。

「人のために 自分の幸せのために 園子よ 自らが決めた勉学の坂道を 今日登りゆくことだ（第二期卒業生に）」<sup>(81)</sup>

「自分が一番大切である であるから自分を最も大切にしながら 他の人をも大切にしていくことを忘れてはならない（第六期卒業生に）」<sup>(82)</sup>

また、創価女子短期大学の入学式では、学生時代に良き友人を作ることの重要性についてふれており、豊かな人格形成に人間同士の交流が不可欠であると述べている<sup>(83)</sup>。

## ② 池田の思想の独自性

次に、池田の教育思想の独自性を、大きく五点にわたって考察していきたい。一点目として、池田の女子教育は、まず「女性として」という以前に「人間として」一流を目指したという点が考えられる。これは、“人間教育”という言葉にあるように、人間としての完成を目指すところにこそ教育の意義があるとするものであり、池田思想の一つの核となっている。もちろん、創価女子中学・高等学校の3つのモットーである「良識・健康・希望」はその一流を目指す上での要件

<sup>(79)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、252頁、271頁。

<sup>(80)</sup> 利谷信義・湯沢雍彦・袖井孝子・篠塚英子編『高学歴時代の女性』有斐閣、1996年、31頁。

<sup>(81)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、409頁。

<sup>(82)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、410頁。

<sup>(83)</sup> 五周年誌編集委員会『創価女子短期大学 5年間のあゆみ』創価女子短期大学、1991年、35頁。

となるであろう。巷の女子教育が良妻賢母に偏りがちであった中、池田は精神性を高めること、人間としての強い“芯”を中学・高校時代に築くことの重要性を訴えている。また、「一人の落伍者がでることなく、見事に全員がこの学園から巣立っていただきたい。この学園で育っていった場合には、40代になったときに、優れた、心豊かな、福運に満ちた勝利の人生が待っているということだけは、私は絶対の確信があります。一番大事な人生の総仕上げのときに勝てる基盤を、今つくっているのです」<sup>(84)</sup>、「あとになればなるほど、学園で学んだことが、自分自身の最高の思い出と福運になっていることだけは、信じていただきたいのです」<sup>(85)</sup>とあるように、10代にこの学園で学んだことが40代、50代になったときに花開き、すべて生かされてくると強調している。

昭和43年（1968年）に開校した東京の創価中学・高等学校では「健康な英才主義、人間性豊かな実力主義」の二大方針と「英知・栄光・情熱」のモットーを掲げているが、創価女子中学・高等学校は「健康で情操豊かな女性」「平和の次の世代を築きゆく女性の育成」を目指して設立され、モットーとして「健康・良識・希望」が掲げられている。池田は、価値観の多様化や錯綜化に喘いでいる女子教育の混迷を打開するには、むしろ最も身近な人間性に立脚した人間教育が必要であると述べており、ここでも人間主義の教育が池田思想を特徴づけるものとなっている<sup>(86)</sup>。

二点目としては、リーダーの育成を志向していたという点があげられる。創価女子短期大学設立時に、設立の趣旨として「社会に有為な女性リーダーの育成を目指して」と述べたように、池田は社会において指導的な立場に立つ女性という意味だけではなく、広い意味でのリーダー——つまり、人望や統率力、豊かな人格を備えた女性を求めていたといえる。これは、東京の創価学園開校の際の池田の「創価学園は、あくまでも日本の未来を担い、世界の文化に貢献する、有為の人材を輩出することを理想とするものである」という発言にもあるように、学園自体の創立が日本の、ひいては世界に羽ばたくリーダーの養成を根幹としているという点に通じている<sup>(87)</sup>。さらに、池田は平成14年（2002年）の短大特別講義で、池田は中国の周恩来元総理の妻である鄧穎超が若き女性に対して贈った6項目の指針を通してリーダーのあり方について述べている。第一に「革命の理想を守り抜いてください」、第二に「勇敢であってください」、第三に「責任と真剣を忘れないでください」、第四に「忍耐と持続の人であってください」、第五に「誠実と謙虚の人であってください」、そして第六に、自分自身の幸福のため、栄光の人生を勝ち取るため「たゆまぬ研鑽を続けてください」となっており、ここに短大生を女性リーダーとして育てたいという池田の思いが込められていると言えよう<sup>(88)</sup>。

三点目としては、確固たる幸福観と精神的な鍛錬の重視があげられる。池田は、創価女子中学・高等学校での指導の折に「驍の大切さ」について強調しており、「若き女性を陶冶する学園の生徒として、日常、反復して訓練されるであろうさまざまな驍を嫌わないことを私は望みます。どう

<sup>(84)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、288頁。

<sup>(85)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、292頁。

<sup>(86)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、61頁。

<sup>(87)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、6頁。

<sup>(88)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、27-29頁。



か、皆さんの身に、よい躰系がかかりますように、そして本番の人生の縫い上げが立派で、見事でありますことを心より願うものであります」と述べている<sup>(89)</sup>。このように、しつけに関しては厳しい言説も確かに存在するが、ここで大切なのは、何のためのしつけかという視点であろう。今までの女子教育では、しつけの目的として、世間に対して恥ずかしくない女性になるために、きちんと結婚するために、またよき国民の資質として、などの大義名分が存在したが、池田はどこまでも一人一人の女子生徒が将来にわたって幸福な人生を歩むことを主眼に置いている。この幸福観は、創価学会初代牧口常三郎の「教育は児童の幸福のためにある」という『創価教育学体系』に見られる理念と一致しており、この幸福の獲得、また何が幸福なのかという点についての鋭い洞察がなされているという点で既存の教育理論とは一線を画するといえよう。国や経済のためではなく、自分が幸福になり、また他者をも幸福にしていけるような円満な人格・豊かな教養を身につけた女性を池田は望んでいたのではないだろうか。そして、そのような女性が陸続と生み出されることが、最終的な意味で国や社会の繁栄につながると考えていたといえる。また、幸福に関しては、池田が「私の創立した大学に集ってくださって学生からは、不幸な人を一人も出さないというのが創立者の心であり、願いです」と述べているところに、どこまでも一人ひとりの女子学生の幸福を願う創立者としての慈愛が読み取れる<sup>(90)</sup>。

平成20年(2008年)の創価女子短期大学特別講義では、ノーベル賞を受賞し、世界的な科学者として有名なキュリー夫人について言及するなど、学問や学びについての指導がなされている<sup>(91)</sup>。近年の創価女子短期大学における池田のスピーチは、学生の本分である勉学に対するものが多いように見受けられる。これも幸福になるためには、まず「強く」あることが重要であり、そのためには自分を鍛えることが必須であるということを学生時代に学んでほしいとの創立者の思いなのであろう。だが、男子に対しては、知性を磨き、現実社会で勝利することを強調するのに対し、女子に対しては、知性のみならず、女性らしい細やかさ、聡明さ、思いやりなども重視しており、最終的に「幸福」という一点が強調されている。ここでいう幸福とは何であろうか。男性の場合、社会での貢献や仕事での成功が幸福の一つの指標になりうるが、女性の場合は、社会における立場や役割が一樣ではない。そのため、幸福に対する価値観や考え方もさまざま存在するといえる。これをふまえた上で考えると、女性にとっての「幸福」とは、自分のおかれたさまざまな立場の中で確固たる信念を持ち、前進し続けることを指すのではないだろうか。また、池田は「一人も残らず幸福に」と訴え、自分の中に確固たる心の“芯”を築くことの大切さ、また努力や忍耐の大切さを訴えている。このように近年の女子教育においてはおろそかになりがちな高い精神性の追求とそれに伴う忍耐力の育成に言及しているのも池田独自の視点といえよう。

四点目として、創造性の育成の重視という視点がある。池田のスピーチには、「人格創造」「価値創造」という言葉が随所に出てくるが、これは創価教育の創始者である牧口常三郎の影響でも

<sup>(89)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、227頁。

<sup>(90)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』、76頁。

<sup>(91)</sup> 創価女子短期大学 20周年記念企画編『創立者スピーチ集 創立者と私』。



ある。創価女子中学・高等学校の第三回入学式において、池田は創造性と社会性を身につけてほしいと語っている。彼は、学園生活において、精神や知識の面だけでなく、体も鍛えて健康になってほしい、そのうえで、おのおのの特性を伸ばし、個性的な人になってほしいと述べている。さらに、そうした自分らしさの中で、「つねに新しいものを作り出そうとする創造性と、人のため社会のために貢献しようとする社会性を、持ち続けてほしいのです。平凡な生活の中にも、新鮮な感動、喜びを発見できる人は、自己を創造的に生きているといえましょう」と語っている<sup>(92)</sup>。池田は、婦人雑誌においても女性に向けてメッセージを送っているが、その中に家庭生活を価値創造ととらえる視点が見られる。彼は「創造家庭」「創造家族」という言葉をひきながら、毎日の単調な生活も価値創造の営みの一つであると主張し、その中で自分の知恵を働かせて創意工夫をこらしていくこと自体に意味があり、それが主婦の賢明さであり、素晴らしさであると説いている<sup>(93)</sup>。彼によると、家庭とは、日々、心を豊かにし、家族一人一人の結びつきによって人格を磨き、向上していく「人格創造の場」なのである<sup>(94)</sup>。この観点から考えると、池田にとっては学校生活そのものも人格創造の場であるということになるだろう。このように、教育における創造性の育成の重視をうたっている点が池田ならではの視点であるといえる。

最後の五点目として、教育を通した平和への強い志向性をあげたい。平和という観点から女子教育をとらえているのも平和活動家である池田ならではの視点であると思う。平和構築において、女性を改めて重要な存在と価値づける点や、女性の持つ思いやりや共感の心が平和につながるなど、女性の特質と平和とを結びつけて論じるという点は、他の教育者にあまり見ることができない視点といえよう<sup>(95)</sup>。池田は、今から30年以上も前の関西の創価女子学園の第一回入学式でも「平和」の重要性についてふれ、「平和の真の戦士の卵が、この学園から陸続と育っていただきたい。これこそ、女性の生涯を崇高にする唯一の信条であることを私は信じて疑わないからである」と、女子教育の一つの大きな目的として、平和を生み出す心の育成をあげている<sup>(96)</sup>。この平和の志向性は、彼の教育思想を考察する上で決して忘れてはならない注目すべき点であろう。

## おわりに

明治期には女性の地位はまだ低かったものの、戦後は一貫して女性の高等教育機関への進学率は上昇し、総じて女性の知的・文化的水準を向上させてきた。明治以降主流となってきた良妻賢母思想は、日本の近代化と国家主義に非常によく合致するイデオロギーとして浸透していたが、1960年代からのこの40年余りで、女性の社会的に期待される役割も変化し、それに応じて女

<sup>(92)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、236頁。

<sup>(93)</sup> 池田大作「妻の生きがい」『主婦の友』昭和47年1月号所収、講談社、1972年。

<sup>(94)</sup> 池田大作「成長家族のすすめ—いま“家族の絆”とは」『主婦の友』昭和62年1月号所収、1987年、252頁。

<sup>(95)</sup> エリース・ポールディング 池田大作『「平和の文化」の輝く世紀へ!』潮出版社、2006年。

<sup>(96)</sup> 「創立者とともに」編集委員会編『創立者とともに』、226頁。

子大学や女子短期大学が数多く創立されることとなった<sup>(97)</sup>。戦前において高等教育の機会がほとんどなかった状況を考えれば、短期大学の存在は、女性にとっての高等教育の機会の拡大という点から見て大きな意義があったといえよう<sup>(98)</sup>。また、短期大学が担う女性の職業教育は、一方で良妻賢母としての生き方とは異なる生き方を提示するものであると同時に、男子の職業教育とも異なるものとして位置づけられている。そのような社会的背景の中で、女子中学・高等学校、また女子短期大学という女子教育機関を創立した池田はどのような女性を志向していたのだろうかというのが本稿のテーマの一つであった。今回は、日本における女子教育の歴史を概観することの方にやや重きがおかれ、創価女子中学・高校、また創価女子短期大学での池田の言説については、著作・写真集・文集などの資料の中の池田のスピーチを中心に分析することとなった。だが、「人間教育」「リーダーの育成」「幸福観」「創造性の追求」「平和の志向性」など池田の思想の独自性を浮き彫りにすることができたことは意味があるといえよう。彼の女子教育思想に関しては、今回おこなった文献の基礎的調査だけではなく、卒業生や当時の教員へのインタビューなどのオーラル・ヒストリーも含めて、今後さまざまな角度から考察していく価値があると考えている。池田の持つ思想の先見性や女性観がどのように実際の教育場面や、彼の創立した学校を巣立った卒業生の人生に影響を与えているのかについて検討していくことは興味深いテーマである。

男女共同参画社会になったとはいえ、女性が活躍できる分野はまだ限られていることが多く、さまざまな部分で男性中心社会の残滓が存在している。そういった状況の中では、女性自身が社会参加への積極的な意欲を持ち、自己の能力を高める努力を行うことが何よりも必要である。また、少子化が進み、大学全入時代と言われる現在、どの大学も生き残りのための戦略を模索し続けている。特に女子短大を取り巻く状況は厳しいと言われている中、女子教育は共学にはないどのような意味を持っているのだろうか。これからの女子教育を考えるにあたって、この問いは常に掲げられるべきであろう。女性を「女」という鋳型にはめて育てるという意味での女子教育ではなく、女子としてという以前に、「人間」としていかに成長していくのか、また女性の持つマイナス面や弱さをどのように乗り越えていくかという点に着目していくことが、池田の言う人間教育にも結びついている。また、池田は、平和と女性について以下のように述べている「女性の最大の長所は、絶対の平和主義者であるということであります。この優れた特性が力をもつためには、鋭い感性をもって、広く知性をみがき、教養を深く身につけなければならない」<sup>(99)</sup>。このような平和へのたゆまぬ志向性は、東西の創価学園創立時より一貫して池田が訴え続けてきたことであり、そこに教育者であり、平和活動家でもある池田独自の思想が反映されているといえるのではないだろうか。

<sup>(97)</sup> 村井実・室俊司・樋口恵子編『人間のための教育＝4 <女性>』日本放送出版協会、1973年。

<sup>(98)</sup> 香川せつ子・川村貞枝編『叢書・比較教育社会史 女性と高等教育—機械拡張と社会的相克』昭和堂、2008年。

<sup>(99)</sup> 創価学会女子部編『女子部への指針（改訂版）』聖教新聞社、1985年、75頁。